

(旧) 県民交流広場 全県オフィシャルホームページ 掲載記事

掲載コンテンツ：リレーコラム

掲載時期 平成 18 年 10 月

テーマ 地域に眠る大切な宝物「ソーシャル・キャピタル」の覚醒

寄稿者 NPO 法人 はりまスマートスクールプロジェクト 理事長
コミュニティ応援隊 (CAT) 代表世話人 和崎 宏

地域は 4 人でつながっている？！

「世間は狭いね！」という言葉を使ったことがない人は少ないと思います。知らない人と共通の友人を介してつながっていたことを知った時の驚きを、ネットワーク理論にしたものが「スモールワールド」現象です。米国の社会心理学者スタンリー・ミルグラムは、「6 次の隔たり (Six Degrees of Separation)」という有名な実験を行い、1967 年に『The small world problem』という論文を発表しました。この実験は「人間同士は何人を介して結ばれているのだろう」という問題を明らかにしようとしたもので、ミルグラムは距離の離れた相手に何人の知人を介して手紙が届けられるかを検証しました。その結果、だいたい 6 人の連鎖を介せば、世界中のすべての人間と間接的な知人関係を結べる、という考え方を明らかにしたのです。

同じネットワークの研究に、ベーコンゲームという愉快的な実験があります。これは、ハリウッドの映画俳優ケヴィン・ベーコンと任意の俳優との共演関係の距離を数字にしたもの。ベーコン自身はベーコン数 0、共演したら 1、共演した人と共演したら 2、というように増えていきます。こんな計算で俳優リストから得られたベーコン数の平均はなんと 2.946。ハリウッドの俳優たちは、僅か平均 3 人で接続されていました。ベーコンは、出演映画の数が少し多いくらいで特別な俳優ではありませんし、業界に特別な影響力を持っていたわけでもありません。「ハリウッドの 3 人の隔たり」はベーコンだけでなく、シェーン・コネリーのコネリー数などでもほぼ一緒。どの俳優においてもほぼ同じような結果がでています。

これらの話を私達が生活している地域 (※1) に置き換えると、3 人よりも大きく 6 人よりも小さなステップで住民はつながっているだろうということは容易に想像がつかます。いわば「地域は 4 人で繋がっている (Four degrees of separation in local community)」という仮説です。しかし、現実の生活感の中では地域の中の人々が 4 人で繋がっているという実感は私達にはありません。本来は繋がっているべきはずの人材がリンクされていない理由は、いったいどこにあるのでしょうか。

人と人をつなぐことから、人と人が支え合う仕組みづくりへ

普段から人は、狭い世間の中での偶然の出会いを介して交流関係を結んでいきます。この「偶然」をより「必然」に変え、結ばれた関係性（「紐帯(ちゆうたい)」）を強める機能を発揮するのがソーシャルネットワーキング・サービス(SNS)です。SNSでは、「友達の友達」というようなリンクを辿る中で、自己紹介、日記(ブログ)、掲示板への参加、友人からの紹介文などが直感的な操作で簡単に見わたせるように設計されていて、見知らぬ相手であってもその人物の趣向や人脈が手に取るようになります。この機能が、メッセージの交換や日記へのコメント、掲示板でのやりとりなどの交流を促進させて、常に仲間たちとつながり支え合っているという感覚(常時接続感)を作り出すのです。一般的にSNSは、紹介者がいないと参加できない招待制なので、詐欺や暴力が横行するインターネットの世界のような恐怖感がなく、安心して人的関係を増進させることができます。

本来は安心安全なSNSですが、その規模が巨大化しすぎると、いくら招待制を取り入れていても怪しい人物の侵入を防ぐことはできません。また、話題が広範に拡がりすぎて踏み込んだ意見の交換や実際に出会ったりする現実の交流が難しくなるという課題が出てきます。そこで、日常の身近な交流を促進するために、ある程度特定したエリアの中での信頼できるネットワークとして、地域SNSという仕組みが登場しました。いつも暮らしている距離感だからこそ、嫌いな人や知らない相手を招くことがなく、人脈の中でも特に良い関係にある人物だけが参加することとなり、「友達の推薦する友達は安心できる」という信頼感が、ネットワークの中にさりげなく支え合う心地よいコミュニケーションを創り出しています。

地域SNSという「場」は巨大なSNSと異なり、ネット社会の中だけで人的関係性を促進するのではなく、その効果を現実の生活環境に展開できる強みを持っています。地域SNSで出会った人と語りあい交流が進むと、共通理解が生まれ相互の関係は加速度的に深まります。そして、現実社会においてもネット社会での良好な関係が、相互の立場を超えた信頼関係に育ち、それぞれが属する個別の組織やグループにその枠を越えた関係性を構築し始めるのです。このように地域SNSは、個人的なつながりを起点として地域社会の再ネットワーク化を促す仕組みにもなるのではないかと期待されています。

リアルとバーチャルをつなぐ「参画と協働」の地域社会づくり

2006年10月、コミュニティ活動を支援する目的で県内の地域活動実践者、行政職員、大学・NPO・自治会の関係者、事業家、教育者、主婦、学生、地域住民など多彩な立場の有志が協力して立ち上げた地域SNS「ひよこむ(<http://hyocom.jp>)」は、わずか3ヶ月間に1,400人以上が参加し、毎日22万ページが閲覧されるサイト(※2)に育ちました。その中では、従来の地域のしがらみを超えた支え合う交流関係が活性化しており、日々新たな仲間を加えながら信頼の輪を広げています。全国には200以上の地域SNSと呼ばれるサイトが

あります(※3)が、中でもひよこむは非常に順調に立ち上がった事例として注目を集めています。これには、他の地域SNSでは試されたことのない官民連携の仕組みがありました。

ご存知の通り兵庫県では、本年度から5年間の予定で地域コミュニティの活性化を応援する「県民交流広場事業(※4)」を実施しています。これまではなかなか連携できなかった地域内や地域間の人材をつなぎ、「参画と協働の5つの要素(ともに知る、ともに考える、ともに取り組む、ともに確かめる、ともに支える)」を実践しながら、コミュニティ再生の原動力となる地域力を覚醒する拠点整備をしようというものです。しかしこの理念の実現は、いかにボランティア活動が盛んな兵庫でもそう簡単なものではありません。まずは地域のキーパーソンたちを繋ぐ仕組みが必要で、続いてキーパーソンを起点として地域の人々が自発的につながり広場の担い手となる流れをつくらなくてはなりません。そしてその役割を、地域SNSという新しいツールに託そうということになりました。こんな官民によるシームレスな参画と協働の青写真を描き推進する人たちの高い志によってひよこむは成長を続けています。

信頼できる仲間たちといつも繋がっている感覚の中で心地よく支え合うことができる地域SNSとコミュニティの活性化を応援する現実の政策が融合的に連携する。このデザインが今、人と人の関係性の急速な希薄化を食い止め、多彩な人脈を接続しあいながら、地域の課題を自律的に解決する社会基盤「ソーシャル・キャピタル(社会関係性資本)」を創造しつつあります。コミュニティが潜在する地域力を覚醒し、大いなる自信を取り戻す日がそう遠くないことを信じて、みんなで「参画と協働」を推進していきましょう。

※1 「地域」とは摂津、播磨、但馬、丹波、淡路という旧藩エリアくらいをイメージしています。

※2 2007年1月15日現在、参加者は1,446名、228,754PV/日(12月平均値)

※3 2006年8月の集計でその後の調査は行われておらず、現在の実数は把握できていない。

※4 公式ホームページ <http://www.hyogo.kouryu-hiroba.jp>